

善隣

No.565 通巻832

2025年（令和7年）11月1日発行（毎月1日発行）

2025 11



一般社団法人 国際善隣協会



長寿祝賀会（9月12日）白寿1名・米寿4名・喜寿2名の方からご挨拶をいただきました



善 隣

目 次

2025年11月号

公開講演会記録

流動的な中東情勢とトランプ政権立山良司 2

ことばと社会の歴史をいかに記述するか
——近現代日本の中国語受容を例として温 秋 穎 11

戦後80周年の中の松村謙三と中国
——“草の根”で受け継がれる「松村精神」の輝き岡田 実 20

陶陶俳壇馬場由紀子 27

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 28

協会通信 30

2025年11月の行事予定 31

みんなの写真館

ドイツ北部の歴史と美の象徴（姜晋如）表紙／30
書画に見る日中交流の精神世界⑧
（橘倉酒造不重来館）表 4

—— 善 隣 第565号 通巻832号 ——

2025（令和7）年11月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 井出亜夫

編集人 朝浩之

編集協力 山谷悦子、古田紀子

印刷所 旬ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

流動的な中東情勢とトランプ政権

防衛大学校名誉教授 立山良司



はじめに

ここ数年、中東情勢は想像以上に流動化している。最大の要因はガザ地区をめぐる武力対立（ガザ戦争）であり、殺戮と深刻な人道危機、破壊をもたらしている。ガザ戦争は中東各地にも飛び火し、レバノンではシリア派組織ヒズボラが弱体化した。シリアでもバシール・アサド政権が崩壊し、反政府勢力が暫定政権を発足させた。イスラエルとイランとの対立は互いを直接攻撃するレベルまで激化した。双方ともジレンマを抱えている。

そうした中で、2期目の米大統領に

就任したドナルド・トランプは、矢継ぎ早に新しい中東政策を打ち出している。イランとの核交渉を開始し、5月中旬にはサウジアラビアなど湾岸アラブ諸国を訪問して莫大な経済的「ディール」を結んだ。また訪問中にシリアとの関係を作り支援を表明した。その一方でトランプとイスラエル首相ネタニヤフとの間にはすき間風が吹いているとの指摘が増えている。

以下ではまずガザの現状と流動化している中東の主要な動向を検討し、その上でトランプの中東政策を概観したい。

1. ガザ戦争の現在

(1) ガザの惨状

ガザを拠点とするイスラム組織ハマスが2023年10月7日、イスラエルに大規模越境攻撃を行ったことを契機に、ガザ戦争が始まった。イスラエルはただちに報復攻撃を開始し、戦闘はすでに18か月以上も続いているが、イスラエルは目標としてきたハマス壊滅も人質解放も実現していない。25年1月に停戦合意が発効したが、恒久的な停戦に向けた交渉が行われないまま、イスラエルは3月18日に攻撃を再開した。6月末現在、ガザにはまだ53人の人質が残されているが、生存者は約20人と見られ、人質の生命も危ぶまれている。

米国とカタール、エジプトが仲介しているが、イスラエルとハマスの主張には大きな隔たりがある。イスラエルは人質解放のために一定期間（60日間など）の停戦を受け入れるとしながらも、ハマスの武装解除や戦闘員のガザ退去などを実現するとして、恒久的停戦には応じない姿勢を示している。一方ハマスは恒久的な停戦実現の保証がない限り、人質を解放しないと主張するとともに、武装解除にはコミットしていない。

結果的にイスラエルによる攻撃は続いており、ガザ側の被害は拡大を続けている。ガザ保健当局によると6月11日現在で、10・7以来の死者は5万5100人を超え、負傷者12万7000人強に上っている。イスラエル軍が出す避難命令で、ほとんどの住民は瓦礫の山の中で繰り返し避難を強いられている。住宅や学校、上下水道、医療機関、道路などインフラのほとんどは破壊され、2024年末の国連開発計画（UNDP）の推定によると瓦礫は約5077万トと、東日本大震災の推定瓦礫約3000万トをはるかに超えている。

イスラエルはガザへの圧力強化のため3月2日以降、食料や医薬品を含む人道支援物資のガザへの搬入を全面禁止した。このため飢餓が現実となり、「飢餓を武器化している」との国際社会からの強い批判が上がった。これを受けてイスラエルは5月下旬に支援物資の部分的な搬入を認め、新たな組織「ガザ人道財団（GHF）」が食料などの配給を開始した。しかし物資配給は混乱を極め、連日のように死者が出る事態が続いている。

（2）パレスチナ民族運動とハマス

パレスチナ人は1960年代から民族解放運動を展開した。ヤセル・アラファトが率いた世俗的な組織ファタハを中心とするパレスチナ解放機構（PLO）は、パレスチナ全土の解放を目指し武力闘争を続けた。しかし1980年代になると、パレスチナ全土の解放ではなく、1967年の第3次中東戦争でイスラエルが新たに占領したヨルダン川西岸とガザを解放し、そこに東エルサレムを首都とする独立国を作り、イスラエルと共存するという二国

家解決案の実現を目指す路線に転換した。その結果、1993年にオスロ合意（暫定自治合意）が結ばれ、1994年に暫定自治が始まった。だが合意から32年たった現在も、イスラエルの占領が続いている。

一方、イスラム主義に基づく民族解放を掲げたハマスは主にガザを拠点に、かつてのPLOと同様に全パレスチナの解放を主張し、オスロ合意や二国家解決案に反対し、イスラエルへの攻撃（テロ）を繰り返した。2007年にハマスがガザの実効支配を始めると、イスラエルはガザを封鎖した。この結果、「屋根のない刑務所」と呼ばれるように、ガザは外部との関係を大幅に断たれ、社会や経済は低迷した。だがパレスチナ人は占領に抵抗し続けるハマスに共感を覚えており、支持率は30%前後を続けている。

それでも2023年にはガザのパレスチナ人の間でハマス批判が公然化した。それ以前の2020年にはアラブ首長国連邦（UAE）などがイスラエルとの関係を正常化し（アブラハム合

意)、サウジアラビアも同様の動きを見せ始めた。こうした状況を覆そうとハマスが行ったのが10・7攻撃である。ハマスはガザ内で攻撃準備を続けていたが、イスラエルは「ハマスは攻めてこない」と慢心していた。不意を突かれたイスラエルの被害は甚大で、その反動に加え屈辱感や恐怖心が重なり、イスラエルは国際法違反などの批判に耳を傾けることなく攻撃を続けている。

(3) 出口戦略のないイスラエル

イスラエルのユダヤ社会には「戦後」のガザについてまとまった構想はない。人質解放のために停戦を優先するべきとの声が強い一方で、「ガザは約束の地の一部」という宗教ないし民族主義的な観点から再占領や併合を主張する声も強い。加えてユダヤ人の多くは、イスラエル軍が撤退すればハマスがガザで勢力を盛り返し重大な脅威となるという恐怖心がある。こうした意見対立や恐怖心を背景に、右派主体の Netanyahu 政権はガザへの攻撃を続け、再占領への動きを強めている。

ただガザを占領した場合のコストも

軽視できない。こうした中でネタニヤフや多くの閣僚が口にしているのは、住民によるガザ外への「自発的」移住の促進である。ガザをリゾート地にするというトランプのアイデアに便乗したもののだが、ガザ住民の多数が「自発的」に出ていく可能性はなく、200万超の住民を受け入れる国もない。強行すれば明らかに民族浄化となる。ネタニヤフは政権を維持したいとの政治的打算もあり、「出口戦略」を欠いたままガザ戦争を続けている。

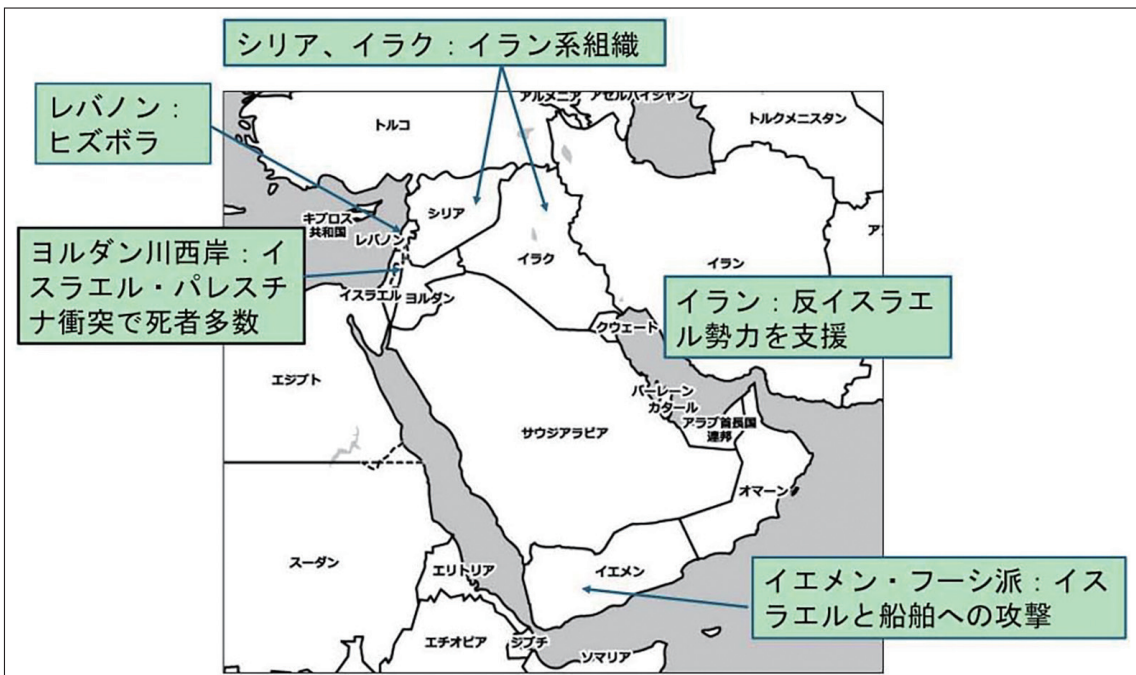
2. ガザ戦争の飛び火と流動化する中東

(1) ヨルダン川西岸での暴力拡大

ガザ戦争はもう一つの占領地である

西岸、さらに中東各地に飛び火した。西岸はファタハを主体とするパレスチ

図1 中東各地に飛び火したガザ戦争



ナ自治政府が自治を行っているが、権限は限定的で、自治区の面積は西岸全体の40%にすぎない。残り60%は現在もイスラエルがすべての権限を握り、自治区内でも軍事行動を続けている。

さらにユダヤ人入植者数はオスロ合意締結時の1993年には約11万人だったが、2023年には50万人超と増え続けている。結局、イスラエルによる事実上の併合が進行している。

こうしたことに強い不満を抱くパレスチナ住民とイスラエル軍との衝突は10・7以降、いっそう激化した。この結果、25年6月初め現在、900人以上のパレスチナ住民が死亡し、1万5000人以上が逮捕されている。特にイスラエル軍は25年1月以来、西岸北部の難民キャンプなどで激しい軍事作戦を続けており、国連によると約4万人が避難民になっている。

過激な入植者によるパレスチナ住民の身体や財産（オリーブ畑や住宅、車など）への攻撃がますます増えている。しかしイスラエル軍は取り締まらず、助長しているケースもある。バイデン

政権は過激入植者や団体に制裁を科したが、トランプは就任直後に制裁を解除した。第1期政権時と同様、トランプは西岸でのイスラエルによる暴力と事実上の併合を後押ししている。

（2）「抵抗の枢軸」とイスラエル

レバノンのヒズボラやイエメンのフーシ派など親イラン組織は「抵抗の枢軸」と呼ばれ、ハマスに連帯しイスラエルを攻撃した。特にイスラエルとヒズボラの衝突は激しく、2024年9月以降、イスラエルは一気に攻勢を強めた。中でも注目されたのは、ヒズボラ関係者が身に付けていたポケベルやハンディトーカーが突然爆発した事件だった。当初からイスラエルの仕業と見なされていたが、後にネタニヤフがイスラエルの犯行と認めた。またヒズボラ書記長もイスラエルによる空爆で死亡した。

この結果、ヒズボラは組織的にも軍事的にもかなりの打撃を被り、2024年11月にイスラエルとの停戦に合意した。加えて後述するようにシリアのアサド政権の崩壊で、イランからレバノンへの武器などの供給路となってい

た「陸の回廊」を断たれた。ヒズボラの政治的な影響力も低下し、レバノン政治は新しい展開を迎えつつある。なおイスラエル軍は停戦合意後もレバノン領内から完全に撤退せず、ヒズボラへの攻撃を繰り返している。

イエメンの反政府勢力フーシ派は宗教的にはシーア派の流れを汲むザイド派だが、フーシ家が率いているためこう呼ばれている。「アラブの春」後に始まった内戦で首都サヌアを含む国土の西約3分の1を掌握した。イランから軍事支援を受けているとされる。フーシ派はイスラエルだけでなく、紅海からアデン湾を航行する船舶への攻撃を繰り返した。25年1月のガザ停戦で攻撃を停止したが、停戦崩壊とともにイスラエル攻撃を再開し、イスラエルも空港や港湾など重要施設への報復攻撃を繰り返している。

このほかシリアやイラクを拠点とする「抵抗の枢軸」勢力もイスラエルを攻撃した。

（3）シリア暫定政権の発足

シリア内戦でアサド政権と戦ってい

た反政府勢力「シャーム解放機構（HTS）」は2024年12月初めに突然攻勢に出て、数日間で首都ダマスカスを制圧した。この結果、父の代から半世紀以上も続いていたアサド政権は崩壊し、大統領だったバッシャール・アサドはロシアに亡命した。

イスラム過激派からなるHTSがどのような政権を樹立するか注目されたが、25年1月に指導者アフマド・フサイン・アッシシャアが暫定大統領に就任し、クルド組織と和解するなど国内統一に取り組んでいる。対外的にもトルコや湾岸アラブ諸国との関係良好化をはかり、アサド体制を支えていたイランの影響力を排除している。この結果、イランはシリア国内での拠点を失い、イランからイラク、シリア、レバノンへと続く「陸の回廊」は分断され、イランはイスラエルに対抗する戦略ルートを失った。

イスラエルはアサド政権が崩壊すると同時に、ゴラン高原の兵力引き離し地帯を超えて軍を進駐させ、さらに兵器が過激派に渡ることを阻止するとし

てシリア軍の兵器庫などを繰り返し空爆した。このようにイスラエルは暫定政権を危険視し、軍事的な圧力を加え続けた。しかしトルコやサウジアラビアの働きかけを受けたトランプが訪問中のリヤドで、シアラアと会談し融和姿勢を示すと、イスラエルもシアラア政権への敵対姿勢を変え始めた。

3. イスラエル・イラン対立と核問題

（1）「影の戦争」から直接衝突へ

イランは1979年のイスラム革命後、反米、反イスラエル姿勢をとり続け、米国もイスラエルもイランを重大な脅威と捉えてきた。ただ通常戦力で圧倒的に劣るイランは、中東各地の「抵抗の枢軸」を支援しイスラエルに対抗するとともに、ミサイルやドローンを配備してきた。さらにイランは自国の原子力開発を「平和利用」と主張しているが、核兵器開発の疑いが持たれている。

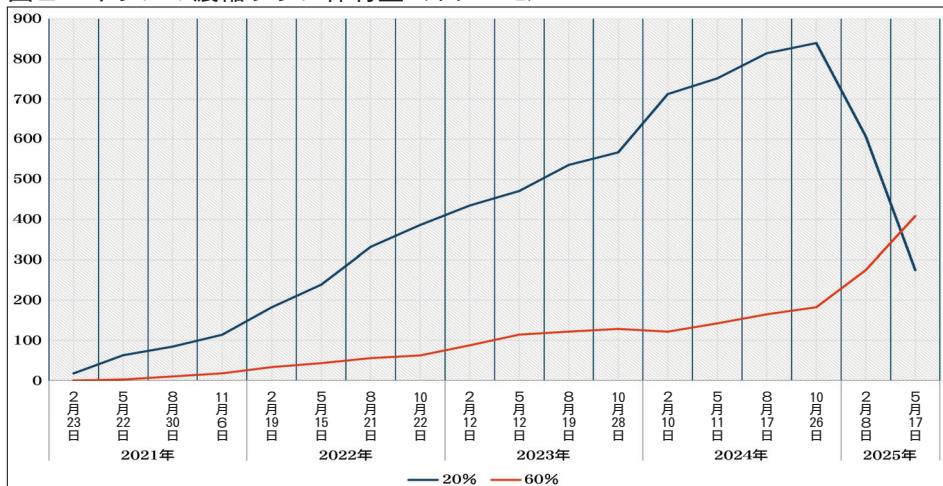
イスラエルは2010年代中ごろから、イランの核施設へのサイバー攻撃や核科学者暗殺などの妨害工作を行って

きた。また「陸の回廊」沿いにあるイラン関連施設や親イラン組織への攻撃を続けてきた。これら水面下のやり取りは「影の戦争」と呼ばれてきた。しかしガザ戦争を契機にイスラエルによる攻撃がエスカレートすると、イランは2024年4月と10月に、自国から初めてイスラエルを直接攻撃した。これに対しイスラエルも2024年中に2回イランを攻撃し、「影の戦争」は直接衝突へと発展した。イランの被害は甚大で、イスラエルはイランの防空システムをほぼ破壊したと評価している。

（2）イランの核問題とトランプの「ディール」指向

イランの核開発を抑えようと、米大統領バラク・オバマは2015年にイランと核合意を結んだ。ウラン濃縮を3・67%以下と低濃縮に限定した核開発活動を認める一方で、段階的に制裁を解除する内容だった。しかしトランプは第1期政権の2018年に合意から離脱し、制裁を再開・強化した。これに対抗しイランも上限をはるかに超えた高濃縮ウランを製造・蓄積するな

図2 イランの濃縮ウラン保有量（単位：kg）



ど、核開発活動を急速に拡大した。この結果、国際原子力機関（IAEA）によれば2024年10月時点でイランは、濃縮度60%のウラン182kgを蓄積している。核弾頭を製造するには濃縮度90%以上のウランが必要とさ

れるが、IAEAによれば、理論的にはイランが保有している182kgの60%濃縮ウランをさらに濃縮すれば、核弾頭4発を製造できる可能性があるという（なおIAEAの6月初めの報告によれば、5月17日現在、イランの60%濃縮ウランの蓄積量は408・6kgとさらに増えている）。

これに対しイスラエルはイランの核施設を軍事攻撃する計画を検討しているが、軍事攻撃は多くの問題を抱えている。イランの核施設は分散している上、一部は地下深くにあり、距離も遠い。これらの核施設を攻撃するためには、大型バンカーバスターや空中給油機が必要だが、イスラエルには大型バンカーバスターはなく、空中給油機も旧式といわれている。このため米国の何らかの協力が不可欠といわれている。さらに核施設の破壊に成功しても、イランの核に関する知識やノウハウは破壊できず、むしろイランが核兵器開発を本格化させる危険が一気に高まる。またイランの報復によってイスラエルはかなりの被害を受ける恐れがあると

ともに、ペルシャ湾地域が一気に不安定化し国際経済に重大な影響を与える。

（3）核交渉をめぐる3か国の相違

2015年の核合意に強く反対したネタニヤフは現在も、どんな合意でもイランは世界を欺いて核兵器を開発・製造するため、民生用を含むすべての核開発活動を禁止し、既存の核関連施設も破壊か撤去すべきだとの強硬論をとっている。また弾道ミサイルなどの攻撃的兵器の製造やテロ支援の禁止を主張している。さらに可能であればイランの現体制を転覆させたいとも考えている。一方、イランは平和利用を目的とした核開発活動は核不拡散条約加盟国の権利であり、民生用のウラン濃縮を続けると主張している。ただ蓄積した高濃縮ウランや、現有の先進的な遠心分離装置をどうするかは明らかにしていない。また弾道ミサイルの開発・製造は自衛権の問題で交渉の対象ではなく、もともとテロ支援は行っていないと主張している。

1期目で核合意から撤退したトランプは、2期目では「ディール」を目指す

と繰り返しており、4月にイランとの交渉を開始した。これまでのところトランプはイランには低濃縮活動も認めないと発言しているが、主張の隔りは大きい。イランとどのような合意を結ぶのか、イスラエルの反対をどう説得するか、さらに交渉が不調に終わった場合、軍事攻撃に踏み切るのかなど不明点が多い。

4. トランプの中東政策の狙い

(1) トランプの湾岸諸国歴訪

5月13日から16日にかけてトランプはサウジアラビア、カタール、UAEの3か国を訪問した。訪問中に武器や航空機の輸出、エネルギー産業やAIなど先端技術開発への相互投資など、総額で2兆ドルともいわれる「デール」を結んだとされる。まだ確定していないものが多いようだが、今回の湾岸訪問が明らかにしたのは、トランプがバイデンとは異なり、民主化や人権問題などアラブ諸国の政治体制の在り方には無関心で、経済的な実利を最優先にしていることである。資金が豊かな湾岸産油国との取引は「アメリカを再び

偉大に」というトランプのスローガンと直結しているといえる。

政治よりも経済を重んじるトランプの志向は、産業構造の転換を目指す湾岸アラブ諸国の思惑とも完全に一致している。サウジアラビアは2016年に総合的な経済開発計画「ビジョン2030」を発表した。化石燃料への依存を減らし、AIや再生可能エネルギーなど環境関連技術の開発、観光やエンターテインメントの振興など、新しい分野の産業振興を目標としている。カタールやUAEにとっても脱炭素は共通の目標である。

(2) 対立回避が主軸に

経済の重視は必然的に、中東域内での対立緩和や回避を促している。サウジアラビアとUAEはともに2010年代、イランと激しく対立し国交断絶などもあった。対立はイエメン内戦にも影響し、サウジアラビアとUAEは2015年に、イランの支援を受けているフーシ派への軍事攻撃を開始した。しかし2020年代に入るとUAEもサウジアラビアもイランとの関係を修

復し、フーシ派との間でも2022年から事実上の停戦が維持されている。

イスラエルとアラブ諸国との間でも水面下で関係拡大が進み、2020年にはUAE、バーレーン、モロッコがイスラエルとの関係を公式に正常化するアブラハム合意を結んだ。さらにイスラエルとサウジアラビアとの関係正常化に向けた動きも顕著になった。しかし前述したように、この動きはハマスによる10・7イスラエル攻撃の一因となり、アブラハム合意拡大の動きはストップした。それでもUAEなどはイスラエルとの関係を継続している。

経済的な実利を優先し対立を回避する姿勢はトランプの中東外交にも表れており、1期目にあれほど批判したイランとの核合意を目指し交渉を続けている。他方でトランプは、ネタニヤフが持ちかけたイランへの共同の軍事攻撃案を蹴ったといわれている。サウジアラビアやUAEもかつてはイランとの核合意に反対していたが、今は合意成立を支持している。軍事力による問題解決はペルシャ湾全体を不安定にし、

経済発展に好ましくないという認識が共有されているのだろう。

トランプはまた、湾岸訪問の直前にフーシ派との停戦を発表した。フーシ派と敵対するイスラエルにとってこの発表はショックだったようだが、サウジアラビアなどが停戦を働きかけたといわれる。同様にサウジアラビアやUAE、さらにトルコの働きかけで、トランプはリヤド滞在中にシリアへの制裁解除を表明し、暫定大統領シアラアと会談した。こうした動きにも、経済的な実利を優先するトランプと、経済発展のために地域を安定させたいという中東各国指導者との共通の思惑が表れている。

(3) トランプ・ネタニヤフ関係に亀裂？

一方で、経済的な実利を優先するトランプとネタニヤフとの間に微妙なすき間風が吹いている。1期目にトランプは、米国の歴代政権がとってきた政策を大幅に変更し、エルサレムの首都公認や在イスラエル米大使館のエルサレム移転、ゴラン高原の領有公認など、かつてない親イスラエル政策をとった。それだけにトランプは絶対的なイスラ

エル支持者と見られることが多い。しかし本当にそうだろうか。

確かにトランプはイスラエルを強く支持している。だがその背景にあるのは、思想的・宗教的な信条ではなく、米国内のイスラエル支持票を取り込むための政治的な打算である。一方バイデンは、数多の困難を乗り越えてユダヤ人国家を樹立したシオニズムと、その成果であるイスラエルを称賛し続け、自ら「シオニスト」と称していた。その意味でバイデンの信条的なイスラエル支持とトランプの打算に基づくイスラエル支持はまったく次元が異なっている。

特にこのところ、イスラエルに対するトランプの「冷たい視線」が目立っている。湾岸訪問はバチカン訪問を除き2期就任後初の外国訪問だったが、トランプはイスラエルをスキップした。イランの核問題ではイスラエルの強い反対にもかかわらず、合意による政治的決着を目指している。イスラエルが敵対しているフーシ派との停戦や、「イスラム過激派」と危険視しているシリアへの融和姿勢も、イスラエルと

の間に食い違いがあることを示唆している。さらにガザに関しては、ガザ住民の人道危機に繰り返し言及し、人質解放や停戦実現のためにハマスと直接接触したことも判明している。

もちろんトランプがイスラエルとの関係を大きく冷え込ませることはあり得ない。米国内のイスラエル支持勢力はトランプの重要な支持基盤であり、イスラエルとの軍事的な関係も中東における米軍の戦略にとって欠かせない要素だ。トランプは西岸での入植者の暴力に目をつむるなど、事実上の併合も黙認しており、イスラエルへの軍事援助を拡大している。その反面、ネタニヤフのあまりにも攻撃的な姿勢が中東を不安定にし、トランプやアラブ産油国の目指している経済的な実利を損なう危険がある、とトランプは計算しているように思える。

おわりに

中東の将来を考えると、決して楽観的にはなれない。たとえガザで停戦が実現しても、避難民があふれ瓦礫の山

と化したガザをどう復興するのか想像すらできない。西岸情勢も悪化の一端をたどっており、パレスチナ問題の根本的な解決策を見出せる状況にはない。

サウジアラビアなどアラブ諸国とイスラエルとの本格的な関係正常化は当面はあり得ないだろう。イランとの交渉の行方は不透明で、イスラエルによる軍事攻撃の危険がさらに増す恐れがある。シリアやレバノンが安定化する道のりは遠く、イエメンやソマリア、リビアは破綻国家状態にある。

膨大な石油収入は産油国を豊かにしているが、急速な経済開発は社会のひずみを拡大させている。しかも中東のほとんどが人工的に作られた国であり、宗教・宗派、民族や部族、地域の違い、貧富の差など社会的亀裂が多数あり、国家としての一体性が十分ではない。

日本から見た場合、エネルギーの供給地域であり、世界経済への影響は大きく、核拡散防止などの面からも中東の安定は欠かせない。その意味で日本は今後とも中東の安定に努めていく必要がある。さらに法の支配に基づく世

界秩序の形成は日本の主要な外交課題であり、この観点からも日本は人道危機を含むガザ問題への対応を積極的に行っていく必要がある。

追記（2025年10月13日記）

イスラエルは25年6月13日、イランの核施設などへの軍事攻撃に踏み切り、イランもただちに反撃を開始した。相互攻撃は6月24日まで続き、「12日間戦争」と呼ばれた。米国も6月22日にイランの主要な3核施設を地下貫通弾などで攻撃した。イランでは死者が1000人を超え、核施設にも甚大な被害があった模様だ。ただ被害の実態はわかっておらず、イランは核開発を続けるとしている。イスラエルはイランが核開発を再び本格化すればさらに攻撃するとしており、核をめぐる対立は今後も続く。一方、ガザでは10月10日にトランプの和平案に基づく停戦が実現し、2年間の戦争は終結した。停戦実現の直接的な契機はハマスが人質の一括解放に合意したことで、背景にはガザ住民はこれ以上の犠牲に耐えられないとの認

識がハマス内で強まったことが考えられる。イスラエルも戦死者の増加、予備役兵の負担増、戦費拡大など、社会的経済的に疲弊していた。今後の課題は停戦を維持するとともに、苦境にあるガザ住民の救済やガザの安定化であり、そのために国際社会はさまざまな支援を行う必要がある。

（2025年5月29日・公開講演会）

筆者略歴（たてやま・りょうじ）

早稲田大学卒。（一財）日本エネルギー経済研究所客員研究員。国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）職員、（一財）中東経済研究所研究主幹などを歴任。専門は中東現代政治。

主な編著書に『ユダヤとアメリカ』（中央公論新社、2016年）、『イスラエルを知るための62章（第2版）』（明石書店、2018年）。最近の論考に「大イスラエル主義」という巨大な潮流」（『Voice』2024年12月号）など。

公開講演会記録

ことばと社会の歴史をいかに記述するか

——近現代日本の中国語受容を例として

京都大学人文科学研究所特定助教

温秋穎



近現代日本社会における中国語は不幸だったのか

中国文学者の吉川幸次郎は日中戦争の最中に、「支那語の不幸」という文章を発表したことがある。そこで挙げられた不幸とは、「支那語」と国語が「同文」であるという万能思想、「支那語」はやさしい外国語だという思想、日本古来の「漢文訓読法」という3点であった。彼はさらに、「支那語の不幸はすくはねばならぬ。学術のためにも、政治のためにも」と説いた。また戦後まもなく、中国語学者の倉石武四

郎は、日本人の中国認識の最大の過ちが中国語の読み書きにあると考えて、「中国のことばはその文字だけ見れば好い、ことばなどは要らない、という考えかたこそ最も大きな失敗であった。そのために日本人は訓読の漢文を読んで足れりとして生きた言語をおろそかにし、机上の書物だけを貴んで生きて物いう人を忘れた」と述べた。

現在「中国語」と呼ばれることばが、かつての「支那語」であるが、そのことばになぜ不幸が生じたのか。また、その不幸な「支那語」は、教養としての外国語である英・独・仏語と異なり、

しばしば学術や政治の裏道に迫いやられがちではあったが、一度たりとも「教養語」にならなかったのだろうか。拙著『近現代日本における中国語受容史——メディア・教育・言語観』（岩波書店、2025年3月）はこうした問題意識に基づいて、近現代日本における中国語の受容史と、中国語受容の言語観を記述するものである。

近現代日本における中国語受容史というこの研究の学術的問いは以下のよう設定されている。まず、中国語は外国語のほずであるが、近代の日中間係ゆえに、そして漢字を使って表記さ

れる性格ゆえに、その言語の他者性は常に複雑なものであった。この複雑な他者のことばである中国語の受容を通して、近現代日本は同時代の中国のことをどう見ていたのか、本研究はこの点から、日本の中国認識を考察した。また、近現代日本社会にとって、外国語としての中国語は「教養」であったのだろうか。この問いは、西洋語の英・独・仏語、さらに漢文訓読と比較して、日本で形成された「教養」という価値判断を理解しようとするものである。

ことばと社会の歴史をたどる受容史というアプローチ

ことばと社会の歴史に関する研究の領域において、外国語教育史、とくに英語教育史の成果はもっとも豊富である。中国語教育についての史的研究は日本では1980年代以降に体系化されていき、なかでも、明治期から中国語の教科書、辞書類を網羅的に収集して分類し、解説を加えて資料集成として出版した早稲田大学名誉教授・六角恒廣氏の業績が特筆に値する（『中国

語教本類集成』全10集、補集全5巻）。1980年代以降から近年までの中国語教育史の分野において、教師と教材の史的考証に関する蓄積が多く、戦前日本の「支那語教育」にあった実用性と非科学性を批判するという反省的な研究のスタンスが特徴であった。この研究のスタンスは、本稿の冒頭で述べた吉川幸次郎、倉石武四郎のような、中国語を軽蔑する社会観念や学問体制に不満を抱いていた教育者、文化人の批判的な心情に共振しつつも、それらの言説を中国語教育史の考察対象として詳しく考察しなかったといった不足点が指摘できると考えられる。

このように、「支那語教育」の現実と、それを同時代的に批判的に捉えていたものとの見方とをともに包摂することにより、中国語教育をめぐる史的研究に、文化史や社会言語学の分野にも接続できるような新しい視座を提供することが可能だと考えられる。そこで本研究では、ことばをめぐる教育の行為のほか、ことばの学習と研究も含めて、これらの三つの観点を融合し、三位一体としてのこ

とばの受容史を描き出そうとした。例えば、一般民衆が学んだ学習雑誌やラジオなどのメディアの場に注目することによって、コンテンツの作り手としての教師と、その読み手としての学習者の相互関係を考察することができる。研究という第3の観点から言えば、中国研究や中国理解に資する語学学習とは何かという当時の言語認識を析出することで、中国語受容のなかの思想的側面に光を当てることができよう。

思想的側面に着目した外国語受容史の記述は、言語イデオロギーという文化人類学における研究関心と対話する可能性も持ち合わせている。1960、70年代に言語イデオロギーという概念が文化人類学の「Speaking School」において誕生してから、「社会と言語の関係についての考え方の文化的システム、およびそこに積み重ねられた道徳的、政治的な利害」といった定義がなされてきた。しかしながら、いままでの言語イデオロギーの研究においては、民族語、国家語に重点が置かれてきており、それらの「われわれ」のことばと対置される

「他者」のことば、例えば外国語や方言のイデオロギーを中心とする考察はやや不足していたように思われる。

メディアと大衆社会、戦争と平和の時間軸

以下、拙著『近現代日本における中国語受容史』の内容を概観していきたい。まず、この研究の起点である1930年代前半から、考察の一区切りとしての1970年代までという時間設定について、そこに内包されているメディアと大衆社会の時間軸、および戦争と平和の時間軸を説明したい。

時期設定の起点となる1930年代は、新しい音声メディアが出現し流行し始めた頃である。ラジオ放送の「支那語講座」で正則的な中国語が教えられたことは、〈声〉の中国語受容の大きな転換点であったと考えられる。新しいメディアであるラジオ、レコード、さらに印刷物のなかで規範化された発音記号の普及によって、外国語としての、話したこととしての、中国語が広い範囲で一般人によって認識され、想像されうるよ

うになったのである。時期設定の終わりは、テレビという映像メディアのなかで同時代の中国の様子が具現化され、中国の「虚像」が「実像」に変わっていく1960年代後半としている。

メディアと大衆社会の時間軸のほかに、戦争と平和の時間軸も本研究のなかに内包されている。具体的に言うと、日本近代史の戦前と戦後の連続性を意識し、中国語受容の「貫戦史」を考察している。1930年代の満洲事変や日中全面戦争は、日本国内に中国語ブームをもたらした。しかし、日本国内の中国語ブームはこれらの戦場の不在を前提としたものであり、中国語は敵国のことばどころか、親善友好のためのことばとされることが多かった。戦時下にはやった中国語は「日支親善」のための必須な知識であり、変種の教養であった。日本における第2次世界大戦の終結は1945年とされることが一般的であるが、日中関係の場合は「二つの中国」の問題によって大きく翻弄されていた。冷戦という危機の時代において、語学を通して一定の文化交流のルートが保

たれた一方、遠い国への新しい想像、ないし新しい虚像も喚起された。

「支那語」か「満洲語」か ―揺れていた中国の他者像

1930年代以降に徐々にエスカレートしていく日本の大陸侵攻の時代、日本国内では小さな中国語のブームを迎えており、ブームのなかで中国という他者に寄せられる想像は時局とともに揺れていた。

1931年2月に、外国語学習の番組として「支那語講座」が日本放送協会東京中央放送局（JOAK）の第二放送の実験放送で流され、その後も好評につき、1941年まで10年間放送が続けられた。また、1932年に「支那語講座」が大阪放送局（JOBK）と札幌放送局（JOIK）で、「満洲語講座」が名古屋放送局（JOCK）でそれぞれ新設された。

開設当初の大阪放送局では、担当する講師は対等他者としての中国を聴衆に提示しようとしていたことが見て取れる。まず、会話のテキストは流暢

な中国語の口語で書かれており、中国の人情風俗に適応した実践性の高いコミュニケーションと言えよう。病院、買い物などの会話、仕事の場面における交際、雑談のほか、家族・友だちの近況についてなど、中国人とより深く接するための会話も提供され、「請（どうぞ）」という丁寧語がよく使われている。中国語を話す中国人が身近にすることを想像させるのは、中国に進出する民間資本に携わる人や開拓移民などを聴衆として想定していたためかもしれない。

例えば、次のような例文が見られる。

友だちの近況について 誰ですか、徐伯言ですか。／そうです、徐伯言です。／どこに行ったか知りません。

ここでは誰も彼の行方を知らないようです。／去年の6月から便りがありません。手紙ありません。／彼は北京に行っているのかもしれませんが。北京に行くと言いましたからね。／そう、お金儲けにでしょうか。／わかりません」（引用者訳）。

また、梁啓超、郭沫若、蔡元培など

の清末民国期の知識人が書いた白話文の文章も、語学講座のテキストに掲載されていた。白話文は、古典中国語の文語文と対置される、口語に近い文体であり、中国の文学革命で提唱されてからその使用が徐々に広まり、1920年代における中国の学校教育の普及により定着した。白話文に関心を抱いていた大阪放送局「支那語講座」の講師・奥平定世は、この時点で、国家や民族のために立ち上がるとする他者としての中国人の姿を、部分的ながら日本の聴取者に知らせようとしていた。

例えば救国の呼びかけに奔走していた梁啓超が1919年に発表したエッセイ「無聊消遣」が全文引用されており、「人がとても怠惰であるならば、この人には未来がなく、全国の人々がとても怠惰であるならば、この国、この人種には未来がない」（引用者訳）という訴えが載っている。

しかし、白話文テキストを用いた「支那語講座」は、わずか3か月で放送期間を終えた。満洲事変を経て、とくに1932年の満洲国の建国以降、

日本放送協会は時局の満蒙問題に合わせて番組を再構成した。1934年の「満洲語講座」に改名されたテキストに、「最近満洲国が独立致しました。建国僅に2か年を経過した今日、早く既に各般の国勢整頓して今年1月20日午後4時には帝政を布いて元の清朝の宣統皇帝溥儀氏が執政の地位から遂にこの国の皇帝の実位に登られ」と記されているように、満洲国建国と帝政へ移行することの重要性が同講座で明確に意識されていた。

それにもかかわらず、同講座の「満洲語」とは、実質的には当時「支那語」と呼ばれていた漢民族の北京官話と同一のものであったことは、ラジオテキストに記された漢字文と、仮名、ローマ字で示された発音から明らかであった。漢民族の北京官話を「満洲語」と呼ぶことにより、日本帝国の同盟に近い存在として政治的に位置づけられる満洲国の言語を、敵性「支那語」から区別したのである。そこに中華民国と異なる満洲国の独立性を強調する政治的な考慮があったと言える。

戦前の「支那語」は変種の教養語であった

中国語のブームにおいて他者のことばと中国の像は揺らいでいったが、1930年代以降に中国語が教養語として追求されていたことも確かであった。

教養語とは、英・独・仏語という「教養語学」の価値観とは別に、この研究において独自に設定した概念である。中国語を教養語としてもとめていた近現代の日本人は、英・独・仏語の教養、さらに、訓読法で読む書きことばとしての漢文の教養を強く意識しながらも、英・独・仏語という「教養語学」と異なった〈声〉のことばの価値観を打ち出していたのである。それは、話しことばとしての中国語を身につけることにより中国人と円滑なコミュニケーションを取り、さらに、日本にもともとあった中国認識よりも中国の文化や思想を深く知っていかうとする他者理解の志向である。1930年頃から1945年まで、外地と内地で発行された中国語の学習誌は少なくとも11種類が存在した。そ

れらの学習誌の編集と出版に携わっていた多くの人たちは、日本国内の外国語学校、商業学校の中国語教師であり、彼らは中国語の普及や中国語学の再編を目指すという理想を学習誌に託していた。例えば、『華語新声』創刊号の編集後記には、「埋もれた支那語文化の再吟味を為す！夫れが本誌の使命である。シェイクスピアやミルトンを支那に見出し、両江の辺に生まれた人類の源を、もう一度世紀の光に当たらしめるのは日本人に否アジア人に与へられた大きな使命である」と記されている。

創刊初期の日本国内にいる編集者、執筆者の多くは、中国語教育を改革する意志をもっていた。彼らは、中国語の音読法をほとんど採用していなかった支那学や漢学という同時代の中国研究のやり方に反発し、当時からすでに「戦争語学」と呼ばれていた中国語の社会的地位にも不満をもっていた。他方、一連の学習誌の創刊ラッシュは、緊迫していく日中関係の時局を迫認したものであったことも注目し値する。下記のように、この頃の中国語研究と中国語学

習の意義はしばしば日中関係や中国関係の時局と結びつけて論じられていた。

満洲国独立と共に日滿の政治的、経済的、文化的関係は益々密接となつて来ました。支那語の必要もいよ／＼直接的となり、支那語研究者は勿論、實地に彼地にあつて大々に活躍されむとする諸氏にとつて誠に本誌は無二の伴侶となることを契ひます（宮越健太郎主幹『初級支那語』外語学院出版部、1932年に創刊）。

また、拓殖大学教授・宮原民平主幹『支那語雜誌』の「創刊の言葉」（1941年）では、日本の当面の問題を「支那事變の処理問題」と「日本を盟主とせる大東亜共栄圏の建設」として、「此等の諸案件の遂行途上、政治・経済・文化の各層に於て共栄圈内相互の交渉が繁くなつて来るにつれて、最初に取上げられるのは何と云つても言葉の問題であります」と言うように、中国語学習の意義を説いた。

日中関係の時局や中国語ブームに使

乗し、学習誌の発行を通して中国語教育、中国語学研究の質的向上を図っていたが、やがてこの理想が読者が求めた中国語学習や時局との間で齟齬を来すようになり、難航していった。時局下で生まれた中国語のブームの疑わしさには抵抗を示しつつも、中国語研究の方法論における行き詰まりを容易には打開できないという感覚は、大阪外国語学校支那語部が主催した『支那及支那語』の編集部と、読者の間で共有されていた。

また、東京外国語学校の教師らが中心となった『支那語』は、編集方針を改め、読者を最大限に獲得するために、中国語受験などで実利を得る動機とその市場に迎合していった。総じて言えば、時局、市場に容易に影響されたこれらの学習誌の理想は脆弱なものであった。

1932年に東京の春陽堂から発刊された学習誌『支那語雑誌』の巻頭言で書かれたように、階級を超えて「万人が僅かの余暇を利用して楽しく」得られるような、日本社会における中国語の理想像が当時において期待されていた。日本放送協会のラジオ「支那語講座」

と一連の学習誌は、このような一般大衆の教養としての中国語が模索されていた場であった。ただし前述したように、中国語を教養として追求する理想は、時局と複雑な関係にあった。戦前の大衆レベルで追求されていた理想は脆弱であったため、時局の下で生まれた教養もいわば「変種」の教養であった。

敗戦後の「中国語」の再建

それでは敗戦を迎え、変種の「教養語」はいかに変貌したのだろうか、中国語の教育と学習の行為に付随する人々の中国認識はいかに変わっていったのだろうか。

社会学研究者の橋本明子は『日本の長い戦後―敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』（山岡由美訳、みすず書房、2017年）において、敗戦前後における日本人の道德規範について、1945年の日本の降伏にともない、アジア太平洋戦争は欧米白人の植民地支配から「大東亜共栄圏」を守る天皇のための「正しい戦争」が、たちまちのうちに「間違った戦争」に

変わったことを指摘している。一方、この「間違った戦争」の範囲が限定的であったことは、日本近現代史の分野において以下のように指摘されたこともある。「国民の間にアジアに対する優越意識・蔑視意識が根強く残存し」（吉田裕『日本人の戦争観―戦後史のなかの変容』岩波書店、2005年）、「中国はじめ南方のアジア諸民族に対する加害責任や植民地支配に対する責任の意識は、総じて希薄であった」（馬場公彦『戦後日本人の中国像―日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社、2010年）。

敗戦という時間の節目は、中国語の研究・教育・学習の世代交代にも大きな影響をもたらした。この変化には、中国語関係者の年齢や出自、教育の経験の多寡だけでなく、戦時中の教育と学習の経験が、戦後の世代に受け継がれるべき無罪のものであるのかどうかという戦争経験のイデオロギー的な問いかけにも強く関わるものであった。「我々が帝国主義のお先棒たるべく、支那語を学んだのは、昔の苦い思ひ出と

なつた」「戦争は終わった。自由と真理が強権に打勝つ日が来た」(『新中華』巻頭言「華語の回復」、1946年)というように、敗戦直後の日本の一般大衆、論壇と比べれば、中国に戦争をもたらししたことに対する中国語教育界の反省的態度は特筆すべきであろう。

中国語学者の倉石武四郎のもとで行われた中国語教育界の再建に、中国語学研究会の発足、中国語方言の共同研究、新制東京大学の教養学部における中国語を必修科目とするクラス(通称Eクラス)の設置が挙げられる。1946年に京都大学で中国語学研究会(現・日本中国語学会)の最初の研究会が開かれ、翌年に会報の『中国語学』が発行される。『中国語学』で刊行された研究は戦前のそれより総合性が高く、1950年代が日本の「中国語文法研究の幕開けであった」という評価も見られる。

1949年に中国語が必修の外国語科目として高等教育機関の新制東京大学に設置された意味は大きかった。それまで日本の高等教育において、必修科目とされる外国語は英・独・仏語の

みであって、中国語の場合は、漢文訓読法で文章を解読する技法は教えられていたが、耳と口から学ぶ外国語としての中国語はほとんど重要視されていなかったのである。Eクラスの独自の実践において、専任講師工藤篁と、主体性が強調される教育によって啓発された学生たちは、中国語のあり方をそれぞれ考えていた。工藤は旧制高等学校の教養主義を一部継承しつつ、侵略戦争に加担した軍用中国語のような実用性を批判した。他方、Eクラスの学生たちは米国が主導する国際秩序に反対し、平和と民主化の実現に対して新中国の方法を唱えたが、語学の学習法ではむしろ話せる、使えるような実用的な中国語に傾いていた。

新しい中国語と新中国

戦前の「支那語」から戦後の新しい「中国語」へと転換するなかで、中国語学の再建という課題が、国際社会のなかの日本の立ち位置や、かつての日本の対中感情・対中認識の限界を問いつつ鮮明に提起された。中国語の研

究や学習が日本の新しい現実は何をもたらすかという問いかけのなかで、「中国語」の新生が強く希求されていたのである。時代の背景から考えると、占領下の社会の民主主義的な雰囲気からの影響もあったが、1949年の中華人民共和国の建国が日本の中国語関係者、中国研究者にもたらした衝撃はやはり大きかったと考えられる。

新しい中国と新しい中国語に対する種々の期待に濃淡の差も存在する。新中国の理念をモデルにしたEクラスの学生らの主要な目的は、大学自治や平和運動などの大学生を担い手とした日本社会の左翼的活動にあり、中華人民共和国との国交正常化という具体的な政治的訴えがほとんど見られない。それに対し、国交正常化を意識していたのは日中友好協会、中国研究所であった。

また、民間学校の倉石中国語講習会・日中学院と多くの中国語教師も国交関係を意識していたが、彼らが掲げた「日中友好」という中国理解、関係改善のスローガンはより穏健的であった。さらに、新しい中国と新しい中国語

に対する期待は時期的に変化していった。ここでNHK「中国語講座」シリーズを例として紹介したい。1958年頃から、NHK「中国語講座」シリーズの放送とその出版されたテキストにおいて、中華人民共和国で公布された公的、標準的な表記法である簡体字とピンイン、そして標準的な話しことばである普通話が採用されていた。同時代の台湾の国府が注意符号と「国語」を公定したことを考えれば、ラジオ・テレビ放送においてそれらを不採用とした放送関係者と中国語教師らの選択には多かれ少なかれ、政治的な意味が含まれていたと言えるだろう。

国交回復前の1970年末に起こったテレビ「中国語講座」の書き換え問題を経て、日本における新しい中国語が中華人民共和国のことばであるという意識はしだいに、番組の放送で強められていった。放送のテキストにおいて、北京にある実在の地名が架空の地名に、劇のタイトル「白毛女」が「草原の歌」に書き換えられたことに対し、同講座の講師や現代中国研究会、中国

語学研究会、民間の中国語学習団体が、NHKに抗議し交渉を続けていった。それらの交渉のなかで争点となったのは、中華人民共和国という属性がテキストの書き換えによって抹消されたことと、NHKが「二つの中国」の立場に立ったといった問題である。

書き換え問題の解決として、1971年2月に現代中国学会宛のNHK教育局長の書簡で、中華人民共和国でいう「普通話」、簡体字、ローマ字記号を継続的に使用するという方針が明記されており、一部の学習者の要望に応じて、文化大革命に関する内容がテレビのテキストにおいて1年以上にわたり掲載され続けていった。

もう一つの教養語という未完の課題

本研究では日中国交正常化の前後を受容史の一つの区切りとしたが、それから現在に至るまで、中国語を含めた諸外国語の教育と学習、受容の仕方はまた大きく変貌した。まず、日中国交正常化の前後、中国語を学習する団体

や個人が増えていった。1971年の日中学院の生徒数は、20年前の約10倍の600人だったと言われる。また、中国の改革開放期以降に盛んになった日中の経済的な往来、1990年代の大学入試センター試験の外国語試験における中国語の導入を経て、今日の日本社会において中国語が第2外国語学習のなかでもっとも選ばれる外国語の一つとなった。

それでは、中国語を「教養語」とする目標は現在において、すでに達成されたのだろうか。中国語を学ぶという行為に、中国人と円滑なコミュニケーションを取り、中国の文化や思想を深く知っていく他者理解の志向が遍在しているのだろうか。今日の日本社会において、中国語を教養語として追求する必要があるのだろうか。工藤肇が1971年に、「友好語学」としての中国語と、戦前のいわゆる「親善語学」としての「支那語」について述べた批判的な意見は、後世に残された警鐘だと言える。「友好とはなんであるか。友好語学とはなんであるのか。『毛沢東語録』

を教材にしさえすれば、それで友好語学となるのか。NHKに抗議し、「普通話」を教え、「日中友好の基本線に沿って」ゆけば、それで友好語学が成立するのか。大陸中国語（普通話）と台湾中国語（国語）とを区別するはナンセンスである」。このように、国家のためのことは、常に個体に対する抑圧を免れない。また、利己主義のためのいわゆる「親善語学」「友好語学」は時として、他者に対する暴力の脅しを背後に隠している。

それでは、英・独・仏語は教養語であるか。作家の多和田葉子が『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』（岩波書店、2003年）において、英・独・仏語に対して明治以来の日本人が持っている「内なる植民地」の発想を以下のように道破している。

特に英語やフランス語など西洋の言語は、日本社会の内部での階級差別の道具として使われてきた。英語が下手だと入試に落ちて一流大学に行けないというだけのことではない、「外国語を習う

こと、留学するということは「高級になること、つまり普通の人と差をつけて、国内で階級を上へ這い上がるという象徴的な意味を持っているらしい。しかも、誰が上手で誰が下手かということが確実に言えるということは、それを決定する権威が自分たちではなく、どこか「外部の上の方」にあるということである。その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想である。それは家元制度的な発想と言うよりは、むしろ植民地的な発想だと言えるだろう。

このように考えれば、中国語を一つの教養語として追求してきた言動は、まさに反植民地的であったと言える。また、中国語が受容された結果に対してその良し悪しの価値判断を行うことは別として、他者理解を志向することばの倫理そのものが、他者の存在を介するものでありながら、最終的には自己の物語を形成するものであると考えている。その倫理は他者へ開示され

るものであると同時に、常に自己に回帰してくるものである。この意味において、この研究を、中国語という他者のことばを通して生成した日本人自身の物語として理解していただきたい。（2025年6月19日・公開講演会）

筆者略歴（おん・しゅうえい）

1995年中国青島生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士（教育学）。日本学術振興会特別研究員DC1、大谷大学助教を経て、京都大学人文科学研究所特定助教。専門はメディア史・メディア論。

主な著作：「日本放送協会「支那語講座」のメディア史（1931～1941）」『メディア研究』第101号、2022年、「戦前日本の中国語学習誌の資料的復元」（石川楨浩編『20世紀中国史の資料的復元』京都大学人文科学研究所、2024年）など。『近現代日本における中国語受容史』（岩波書店、2025年）は第23回アジア太平洋研究賞を受賞。

戦後80周年の中の松村謙三と中国

―“草の根”で受け継がれる「松村精神」の輝き

拓殖大学国際学部教授 岡田 実（会員・顧問）



はじめに

筆者は、前職で中国との国際協力の仕事に従事してきた。その現場では多くの専門家や青年海外協力隊員が、直接交流を通じて相互理解を深めていたが、筆者は、そうした活動ができる根底には、両国の先人の知恵と血の滲むような努力があったことを肝に銘じてきた。

1972年の国交正常化前にその「井戸を掘った人」が置かれた環境は、まさに四面楚歌であった。松村謙三

は、その代表的存在にほかならない。松村は、1950年代末に日中関係が断絶状態になった状況を憂え、1959年を皮切りに5回の訪中を行い、周恩来総理らとの徹底的な対話を通じて、厚い信頼関係を築いた。こうして「総連絡人」として日中の細い糸をつなぐ貴重な役割を担った松村であったが、右翼や党内のタカ派からは「国賊」との罵声を浴び、時には生命の危険すら感じさせる場面もあったという。

翻って、昨今の厳しい米中対立、反グローバリズムの荒波は、この日本に

まで押し寄せてきている。筆者には昨今の諸情勢が、松村が日中国交正常化に命がけで取り組んだ時代と重なって見える。とすれば、行き詰まりを見せる日中関係の打開のヒントが松村の中に隠されているのではないか。本稿は、かかる視点から松村に着目し、特に松村亡き後、「松村精神」がいかに地元に根付き、継承され、その後現在に至る「草の根」日中交流に発展・継続していったのかに光を当てるものである。

なお、筆者は松村と同じ富山県出身であるが、学生時代に直接松村のこと

を教わった記憶がない。その後自分なりに日中関係史を学ぶ中で、松村の功績を書物や映像（松村の葬儀も、日中国交正常化に至る過程で一つの重要な場となっている）の中で知ることになるが、松村という政治家を深く考えるきっかけをいただいたのは、国際善隣協会が講師として招かれた北京大学・初曉波教授からであった。初教授は松村の郷里まで何度も足を運び、ご家族とも交流され、膨大な資料を収集されていた。改めて、国際善隣協会と初教授に感謝申し上げたい。

1. 「松村精神」を育んだ風土・環境―富山県福光町・大隈重信・中国

松村の政治姿勢や思想は「松村精神」と呼ばれることがある。筆者は戦前から戦後を貫く三つの特徴を挙げることができると考える。

第一にアジア主義である。「アジア民族と手を取り、その繁栄と生活向上に最善の努力をし、アジア人の生活お

よび感情を自由国家群の中に溶け合わせる努力をしてアジアの平和に寄与するのが日本の使命である」と松村は主張する。

第二に政治制度の違いを超えた相互尊重と平和共存である。この姿勢は、昨今のいわゆる「価値観外交」とは相容れない。

第三に清廉な政治である。松村と周恩来が肝胆相照らす関係を深めていたのは、松村が中国の社会と文化に深い造詣を持つ稀有な存在であっただけでなく、清廉という人間として基本的な資質をお互いに見出したからというのが筆者の見立てである。

では、こうした「松村精神」を育んだ風土・環境はどのようなものであったのか。松村は富山県西部、石川県境に近い福光町（現南砺市、以下「福光」）に生まれた。福光は、「散居村」で有名な砺波平野の一角に位置し、のどかな田園風景が広がる農村地帯にある。一見、中国と何の関わりもないように思えるが、実は福光は金沢と古来からの交流があり、距離も近かったた

め、金沢を訪れた学者、詩人、画家、俳人、茶人などの文化人の中に福光を訪れたものも多々あったという。その中に中国の文人も含まれ、「福光では漢文の書物ぐらいいは一般庶民でも読む」とまで言われた環境にあった。松村は書道にも優れ、多くの揮毫を残しており、松村記念会館は遺墨集の制作や遺墨展にも取り組んでいる。

こうした文化的風土にあった福光であるが、一方、政治的にも自由民権運動がこの地まで波及し、活発な環境にあった。砺波地方で結成された越中改進黨は、中央の立憲改進黨に合流する動きを見せるなど、福光を中心とした砺波地方は、立憲改進黨の強力な地盤となっていた。松村は、文化的には漢文学が普及し、政治的には自由民権運動が活発な風土の中で育ったのである。

松村は、高岡中学校卒業後、立憲改進黨を創設した大隈重信が設立した早稲田大学に進学し、大隈から直接の薫陶を受ける機会を得る。また大学では中国語を学び、後に袁世凱の顧問も務

めることになる青柳篤恒講師に引率され、学友5名と初めての中国視察旅行を経験する。旅行中、武昌では洋務運動の中心人物の一人であった、張之洞を訪問するなど（結局多忙につき青柳のみ直接面会）、清朝末期の激動の中国を直接見聞する貴重な機会を得ている。さらに2回目の訪中となった、民

政党・済南事件視察団に加わった際、奉天駅付近で張作霖爆殺事件に遭遇し現場を視察している。当時の軍部の引き起こしたこの生々しい事件を現場近くで実体験したことは、その後の松村に影響を与えたことは想像に難くない。

松村はその後終戦まで、翼賛政治会総務、政務調査会長、大日本政治会幹事長などの要職を務める。終戦後の占領下では、東久邇宮稔彦王内閣の厚生大臣、幣原喜重郎内閣の農林大臣に就任し、農地制度改革に取り組み、農地改革案を衆議院に提出するなど、農地改革において辣腕を振るうが、GHQから公職追放の指定を受ける。約5年間の雌伏を経て公職追放解除後、改進黨

党を結成、幹事長を務めた後、第2次鳩山内閣の文部大臣に就任するが、その際に来日中の郭沫若から訪中を勧められたことが、日中関係に深く入り込むきっかけとなった。その後の松村の日中関係改善に向けた精力的な活動については次頁の年譜の通りである。

2. 「松村精神」を継承した「草の根」 日中交流の発展過程

筆者は、南砺市の松村記念会館を訪ね、中国との交流に実際に携わってこられた関係者からお話をうかがい、またさまざまな資料を提供いただいた。それらに基づき、松村の遺志を受け継ぎ、福光が中国とどのような関係を結んできたかを、以下一瞥してみたい。

（1）福光―紹興の友好市町の締結

改革開始開始直後の1979年5月、全国人民代表大会常務委員会副委員長で中日友好協会会長の廖承志（周恩来総理の側近）を団長に、「中日友好の船」で600名の親善使節団が日

本を訪問したが、廖は150名の団員とともに、日中国交正常化の「井戸を掘った人」である松村の故郷・福光を訪れている。このとき福光は、廖の故郷、広東省惠州市との姉妹関係締結を申し入れたという。しかし、松村を高く評価する廖は、周恩来の故郷、浙江省紹興市こそふさわしいと提案したのをきっかけに、紹興市との友好市町締結の話が進んだ。1983年3月、福光と紹興市の友好市町締結調印式が、紹興市魯迅記念館で行われた。紹興市は魯迅の故郷でもある。ちなみに魯迅の恩師であり中国の教科書にも登場する藤野厳九郎先生は、福井県あわら市出身であり、紹興市はあわら市とも友好都市を締結している。

（2）「草の根」交流の発展と継続

その後の福光と紹興市との交流の特徴は、「草の根」交流に尽きる。現在まで14回の訪中団を派遣している「南砺市福紹会」の前身は、福光自治振興会である。1987年に福光公民館が新築オープンする記念に、紹興市

松村謙三年譜（主に中国関連）

年	年齢	主な出来事
1883	0	石川県砺波郡福光町（現富山県南砺市福光町）に生まれる
1902	19	東京専門学校（その年早稲田大学と改称）入学。大隈重信邸で、大隈重信、高田早苗に会う
1904	21	青柳篤恒講師に引率され、学友5名と中国視察。南京、漢口、武昌（張之洞を訪問）、上海（領事館、東亜同文書院、南洋公学（現上海交通大学）などを訪問
1906	23	早稲田大学政治経済学科卒業。卒業論文「日本農業恐慌論」。高田早苗の推薦で報知新聞社入社
1912	29	父逝去に伴い、報知新聞社を辞し、福光に帰り、薬種商を継ぐ
1917	34	福光町会議員当選
1919	36	富山県会議員当選
1923	40	永井柳太郎らと青島、華北旅行。富山県会議員落選
1925	42	福光町会議員再選
1928	45	民政党から立候補し、衆議院議員に初当選。民政党・済南事件視察団に加わり中国へ。奉天駅付近で張作霖事件に遭遇し、現場を視察。帰国後、浜口雄幸総裁に報告。その後、当選を重ねる
1942	59	満州国建国10周年祝典に衆議院代表として参加
1943	60	満州国派遣国会使節団長として食糧増産交渉
1944	61	翼賛政治会総務、政務調査会長に就任
1945	62	大日本政治会幹事長に就任。終戦後の占領下で東久邇宮稔彦王内閣の厚生大臣就任。幣原喜重郎内閣の農林大臣就任。農地制度改革に取り組み、農地改革案を衆議院に提出
1946	63	公職追放の指定を受ける（その前に農相を辞任）
1951	68	公職追放解除（鳩山一郎らと共に）。旧民政党同志と新政クラブ結成
1952	69	改進黨を結成、中央常任委員会議長に就任
1953	70	改進黨幹事長に就任
1955	72	第2次鳩山内閣の文部大臣に就任。来日中の郭沫若から訪中を勧められる
1957	74	首相特使として中近東、東南アジアを歴訪。来日中の廖承志と会見
1959	76	自民党総裁公選に立候補。岸信介に敗れる。周恩来の招待で第1次訪中（約1か月半）
1960	77	新安保条約の自民党単独採決に反対し、石橋湛山、河野一郎らと欠席。池田勇人首相に日中問題打開を要望
1962	79	第2次訪中（約2週間）。積み上げ方式による日中関係正常化で合意
1964	81	第3次訪中（約1か月）。廖承志と新聞記者交換、LT貿易連絡事務所設置で合意、調印
1965	82	自民党外交調査会顧問に就任。自民党顧問に就任
1966	83	自民党「アジア・アフリカ問題研究会」世話人に就任。第4次訪中（5日間）
1970	87	第5次訪中（約1か月）。郭沫若、周恩来と会談
1971	88	病床にてニクソン訪中のニュースを聞く。8月21日逝去。築地本願寺において「故松村謙三先生を偲ぶ会」、葬儀が行われる。王国権・中日友好協会副会長が葬儀参列のため来日。松村謙三顕彰会の拠金により福光町に建設中の「松村記念会館」が完成し、完成式、胸像除幕式
1972		日中国交正常化

出所：『山高水長—松村謙三と中国』を基に筆者作成

から四季を描いた水墨画や白磁の花瓶が贈られたことをきっかけに、福光自治振興会がそのお礼を伝えるに紹興市を訪問。それがその後の相互訪問につながって現在に至っている。

また、「南砺市日中友好教育会」の活動も特徴的だ。友好市町締結の翌年、1984年に、当時の町教育長を団長とした第1次中学生中国友好訪問団派遣を嚆矢とし、今日まで29回もの派遣が継続している（紹興市側からも訪日）。2008年3月には南砺市立福光中学校と紹興市文瀾中学とが姉妹校締結しており、コロナ禍によって相互訪問が困難となった時期には、オンラインでの交流を行っていた。

さらに、議員を中心とした交流活動も長い歴史を有している。「松村謙三顕彰会」（県選出国會議員、県議、市議、町議などを中心に構成）が中国への友好訪問団をこれまで42回派遣しており、中日友好協会や北京大学訪問、紹興市や、富山県と姉妹関係にある遼寧省を含む中国各地の視察を実施してきた。

（3）ユニークな漫画本 「松村謙三」と紙芝居 「けんそはん」

松村記念会館が実施している事業で特筆すべきユニークな事業が漫画本と紙芝居による普及活動である。松村を直接知る町民の高齢化に伴い、

「松村精神」をいかに次の世代に受け継ぐかが大きな課題となっている。

この課題への「切り札」とも言えるのが、漫画本、紙芝居などの教材制作、YouTubeなどを活用した普及である。かつて治水に苦しんだ砺波平野に刀利ダムを建設するなど、インフラ建設による公共の福祉や郷土の発展を実現させ、「日本は平和な環境の中でアジアの繁栄とともに生存すべきである」としてアジア、中国との関係を重視した「松村精神」の遺志を継承することを目的に制作され



マンガふるさとの偉人『郷土の政治家 松村謙三』南砺市教育委員会・松村記念会館、2024年9月（中国語版）。



森みちこ『松村謙三紙芝居「けんそはんと中国のはなし」』松村記念会館、2024年3月。

たこれらの教材は、小中学校の「総合学習」などの授業ですでに使用され始めている。さらに、中国語に翻訳された漫画本は、交流のため県内を訪れる中国の大学生にも配付され、今後、中国を訪問する団体も持参する計画があるという。

3. 「井戸を掘った人」の郷里と日中交流の現状

では、松村と同じように中国側から「井戸を掘った人」と目される人物の郷里では、その精神はどのように継承されているのか。筆者は松村謙三、高碕達之助、岡崎嘉平太、古井喜実、田中角栄、大平正芳の6人を代表的人物に選定し、公開情報を基に、「友好都市」「記念館」「草の根交流」「啓発事業」に分類して整理したのが以下の表である。

まず、友好都市については、松村、岡崎、田中の3人のそれぞれの郷里は、周恩来ゆかりの地と友好関係を締結している。次に交流活動の拠点とも

なり、また「記憶」を継承する場としての記念館については、上記の松村、岡崎、田中に加え、大平、高碕も設置されている。

次に、草の根交流および啓発事業については、松村、高碕、岡崎の郷里が活発であり、とりわけ、松村の郷里・福光が重層的で多様な活動を継続していることが特筆される。既述のように漫画本、紙芝居などの創意工夫は、こうした風土・環境の中で生まれたもの到他ならない。他方、管見の限りその他の市町については、公開情報としてはめぼしいものは見当たらなかった。コロナ禍もあり活動が停滞していることが推察される（今後のさらなる調査が必要）。

日中国交正常化に貢献した代表的人物の郷里における日中交流の現状

	友好都市	記念館	草の根交流	啓発事業
松村謙三	富山県福光町（現南砺市）—浙江省紹興市（周恩来の祖籍地）	松村記念会館	南砺市福紹会（前身は福光自治振興会。一般住民による交流） 日中友好教育会（中学生の相互訪問、姉妹校交流） 松村謙三顕彰会（地元議員などによる交流）	漫画本「松村謙三」（中国語版もあり） 紙芝居「けんそはん」（総合学習の副教材として活用）の制作・普及
高碕達之助	大阪府高槻市—江蘇省常州市（高碕との直接の関係なし）	高碕記念館	姉妹校交流 市民親善訪問・周年事業 医療研修生来訪 行政視察訪問団来訪など	高碕達之助に学ぶ会 高槻名誉市民を語り継ぐ会
岡崎嘉平太	岡山県吉備中央町—江蘇省淮安市淮安区（周恩来の出生地）	岡崎嘉平太記念館	中高生の訪問団の相互派遣	岡崎嘉平太記念館の企画展、講演会、写真展、出前講座
古井喜実	鳥取県八頭町—吉林省大安市（古井との直接の関係なし）	—	最近の交流の記録は見当たらない	
田中角栄	新潟県西山町（現柏崎市）—江蘇省淮安市淮安区（周恩来の出生地）	田中角栄記念館	最近の交流の記録は見当たらない	
大平正芳	香川県観音寺市—山東省青島市即墨区（大平との直接の関係なし）	大平正芳記念館	最近の交流の記録は見当たらない	

出所：各種公開資料を基に筆者作成

おわりに

ここまで見てきたように、松村の郷里・福光においては、息の長い「草の根」民間交流が行われてきたことが確認できた。これは、「松村精神」が地元の広範な支持者に深く根付き、また関係者の努力によって継承されてきたことの証左であろう。他方、たとえ「井戸を掘った人」の郷里であっても、常に記憶を想起し意味を与えて忘却に抵抗する共同体の積極的な行為がなければ、時の経過とともにその活動は形骸化することが避けられないのも、また現実である。

本年は、戦後80周年であると同時に、松村が最後に訪中した1970年から55年目の年でもある。この卓越した政治家が残した「無形遺産」とも言える「松村精神」が、多くの人々によって想起され、彼が求めたアジアの平和と発展の道を再び輝かせることを願ってやまない。本稿が松村を再考するきっかけとなれば幸いである。

参考文献

- 遠藤和子『松村謙三』KNB興産出版部、1975年。
- 木村時夫他『松村謙三伝記編』『松村謙三資料編』財団法人櫻田會、1999年。
- 松村謙三『三代回顧録』東洋経済新報社、1964年。
- 松村謙三没後50年記念誌編纂委員会『山高水長―松村謙三と中国』南砺市教育委員会・松村記念会館、2021年。
- 松村謙三資料集編纂委員会『松村謙三資料集1〜4 松村謙三日記』、2023年。
- 『私の履歴書 第二集』日本経済新聞社、1957年。
- 翟新『松村謙三集団和中国』北京・社会科学文献出版社、2007年。
- 筆者略歴（おかだ・みのる）**
- JICA勤務を経て、2014年より拓殖大学国際学部教授。JICAでは3回北京に駐在。主な著書に

『日中関係とODA―対中ODAをめぐる政治外交入門』『対外援助国』中国の創成と変容1949―1964』『ぼくらの村からポリオが消えた―中国・山東省発「科学的現場主義」の国際協力』『日中未来遺産―中国「改革開放」の中の「草の根」日中開発協力の「記憶』『現代中国の腐敗と反腐敗―汚職の諸相と土壌』（共著）などがある。

原稿・写真など大募集

会員の皆様から、原稿・写真などを幅広く募集いたします。

●みんなの写真館

裏表紙（表2）に掲載する写真、図画。いずれも表題を付けてください。また写真については表題だけではなく、300字程度のコメント（解説文）を付けてください。

国内外ツアーのスナップ、思い出のショット、さまざまな記念写真、日常生活のひとこま、家族写真……、テーマは問いません。原稿をメール、または郵送で事務局へお送りください。

陶陶俳壇

会 句 陶 陶
結 果
2025年9月

兼題 「糞虫」

馬場由紀子

月隠れ波間に明かり残し行く 瀬崎明良

◎善一 月の光が波間にキラキラと光っている秋の夜の景が偲ばれる、いい句である。

◎由紀子 雲が来て月は隠れたり現れたり。波間に滲む月明かりは月の確かな存在を証明してくれる。

●明良 海辺の涼しさが戻ってきそうですが波間に広がる明かりは秋を呼び起こす。

せせらぎが道行く我を励ましぬ //

◎えつこ 「せせらぎ」と聞いただけで涼しい風を感じます。涼しいだけでなく、せせらぎの音には癒やしの効果があるとか。「励ましぬ」でかなり厳しい道を歩いておられる様子が窺えます。

●明良 炎暑を避けた夕方の散歩でも境川の流れの励ましがないと途絶えがちです。

かなかなや路地の質屋を潜る影 松島二三四

◎由紀子 夏の散財が響いたのかな。昭和ではこのような景が見られたのですね。かなかなの音が夏の疲れを癒やしてくれるようです。

◎明良 寮の隣の質屋に私のラジオを持って行った先輩も亡くなりました。貴重なラジオも時代に取残されました。

◎正子 質屋の様子は実際に見たことはないが、寂しい様子が伝わってくる。「かなかな」の措辞がいつそ寂しさを強めている。

◎善一 大学生時代、通学路にあったのですが、お世話にならずに過ぎました。

風鈴ちりん宿題はまだ半分 //

◎由紀子 風鈴はため息で鳴るのかしら。

灼熱のコンクリ石竜子駆け抜けけり 日野正子

◎えつこ コンクリートの暑さは相当なものです。石竜子も大変。

◎由紀子 石竜子も熱いでしょうね。コンクリートの上ではじっとしていられない。

酷暑なり父を偲びて西瓜食む //

◎善一 お父さん大好きな方かな。

救荒の棗帝墓に林なす やまやえつこ

◎正子 この棗はいさ飢饉となったときに役立てられたのか、と作者はふと思ったのでしょうか？

◎二三四

棗は、日本ではあまりなじみがない果物ですが、中国では広く食されており、とくに「補血」作用に優れるということで女性に好まれています。「帝墓」も中国の歴代皇帝の陵墓（のひとつ）と読みました。戦乱と飢饉が繰り返された中国において、乾燥に強い棗は「救荒」の果樹でもあったのでしよう。それが皇帝の陵墓に植えられている様子を遥かに想像しました。……と書いたあとネットで調べたら、棗の球根は救荒植物として江戸期の日本でも重宝されたとのこと。飽食と言われる時代、歴史の哀しい部分を知りました。

◎由紀子 この帝は善政を敷いたのだらう。墓に寄り添う叢林の美がそれを語っているようだ。

稲の香や泥鰌捕りたる幼き日 //

◎明良 私も幼い頃のことを思い出します。泥鰌捕りもありますが、夏の終わりに浅瀬で鮎を追いかけてました。稲の香りの表現が良いですね。

◎正子 さりげない情景ですが、調べてみました。稲の穂が黄色く色づく時期に稲の花が咲き、そのときに甘い香りを放つそうです。

田んぼに棲む泥鰌は、水田の泥の中にもぐり、かきまぜ、泥の中の小動物を食べるなど、よい泥を作って稲の生育に役立っていること、冬には、よく育った泥鰌が、泥鰌鍋の材料になると知りました。

◎由紀子 稲の稔る頃、小川で泥鰌を捕っていらっしやたのだらう。泥鰌捕りの経験はありますが、懐かしい気分にはさせてくれませう。

幼子の磯に蟹追う戸田の夕 日野正子

◎明良 蟹も素早いので穴に潜って逃げますが、懐かしい子ども頃の夏を思い出しました。

梨貫ふ垣の低さを喜びぬ 馬場由紀子

◎明良 近所付き合いの垣根の低さはすばらしい表現です。

◎正子 自家製の梨あるいはお裾分けでしょうか。お隣さんとのほどよい付き合いは嬉しいですね。

◎善一 これはお隣どうしのお裾分けの景でしょう。ふだんからよく垣根越しに立ち話をしたりしている親しい関係性を、垣根の低さに象徴させたところがおもしろいと思いました。こんなおつきあいは、現代ではあまりないのでしょうけど。

◎二三四

鬼の子や揺れ心地良き蔵の軒 //

◎二三四 「鬼の子」は糞虫の別名。糞虫も家（糞）を作る場所をいろいろ考えるのでしょうか。人の出入りが少ない、どっしりした古い蔵の軒は安心して暮らせそう。揺れ心地も満点でしょう。

◎明良 蔵は涼しいところでした。軒もしかりで静かな場所をよく選びました。それが「揺れ心地良き」でしょうか。

◎正子 静かな場所をよく選びました。それが「揺れ心地良き」でしょうか。

◎善一 *旧かな、新かな、作者の意図に任せる。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

権利保護の名目で

近年、「消費者権利保護」をうたった返金請求代行サービスがひそかに拡大している。だが、これらの業者の中には、違法・悪質な者も多く、実質的には「プロの詐欺師」に変質しているケースも見受けられる。彼らは、教育、ゲーム、保険、宿泊など、さまざまな消費シーンで権利保護のため返金を代行すると称し、マニュアル通りの話術や証拠の捏造、訴訟圧力などを駆使し、企業からの返金を勝ち取り高額な

手数料を取っている。

建前は権利の守護者のようだが、実際は詐欺や恐喝、個人情報盗用といった被害も頻発している。例えば依頼者の個人情報を引き出す、虚偽の苦情で企業を脅迫するなどのほか、手付金を受け取るや姿を消す業者やPC画面共有を利用した金銭詐欺もあり、社会的問題となっている。

こうした悪質行為が氾濫する背景には、市場の制度的な抜け穴や返金申請手続きの複雑さと遅さ、監督当局の法的な規制力不足、さらには消費者の無知や焦りが絡んでいる。制度と消費者心理の隙を突く業者の悪質行為を抑制するためには、監督当局による法整備と取り締まり強化、広告の規制、業界によるリスク管理強化が必要だ。企業は返金対応方法の改善と、公式の権利救済ルートの整備によって、消費者が安易に代行業者に頼

らなくてもよいようにすることが重要だ。

消費者も高いリスク意識を持ち、「全額返金」や「即時対応」といった甘言に安易に乗らないよう、正しい知識と冷静な判断が求められる。

『北京青年報』2025年8月12日

時代に合わない子ども運賃

報道によると、福建省龍岩市の一人のシングルマザーの投稿動画が話題となっているという。女性は四人の子どもを連れ実家へ帰省するため高速鉄道に乗った。子どものうち二人は6歳未満で、女性は6歳以上の子ども二人分の切符を追加購入したいと申し出たが、車掌にさらに6歳未満の子どもの一人分の切符を購入するよう要求され、これに疑問を呈したものだ。

法律的には、車掌が3枚の子ども用切符を求めたのは、規定に合っている。交通運輸

部が定めた「鉄道旅客運送規程」第12条によれば、切符を所持する大人一人につき、6歳未満で座席を占有しない子ども一人を無料で帯同できるとある。つまり、二人以上を帯同する場合は超過分の子ども用割引切符を購入しなければならない。

鉄道旅客輸送のコストの観点から言えば、6歳未満の子ども一人を無料としても、座席を使わなければ追加コストはほぼ発生しない。しかし、大人一人が複数の子どもを連れている場合、一部の子どもが座席を占有することになり、その分販売できる切符が減るということになる。

だが、現在「子ども三人時代」が推奨される中、依然として一人っ子時代の「子ども一人無料」の政策が続けるのは時代にそぐわず、実質的には「子ども二人家庭」や「子ども三人家庭」に対する見え

ない差別となっている。

市場化運営されているとはいえ、鉄道旅客輸送は公益性が高く一定の財政補助を受けている以上、国家の出生政策、子どもにやさしい社会づくりに協力すべきではないか。

『揚子晩報』2025年8月14日

国境を越えたトラック運転手

近年、一部の中国物流関係者は海外市場に目を向け、特に東南アジアへの越境輸送を拡大している。江西省高安市は80から90年代にはトラック輸送の一大拠点として栄えた。高安出身の陳潤生さんは、そうした歴史を背景に運転手から身を立てた30年以上の経験を持つ物流起業家だ。彼が東南アジアの越境輸送に注目し始めたのは2021年頃。雲南省の国境でコンテナの積み替え作業を見て、貨物の果物の廃棄削減の必要性に着目、直行輸送ルートの確立が重要

と考え、物流企業数十社と共同で越境輸送の会社を設立した。2024年には江西省高安とカンボジア・プノンペンを結ぶルートを既に160便以上運行している。

GMSCBTA（大メコン圏越境輸送協定）では11のルートが選定された。陳さんはそれらをすべて走破し、詳細な報告と危険区間回避などの提言を運輸交通部門に対して行い、最終選定には一部の意見が反映されたという。

国際物流事業について彼は「需要はあり、利益率も国内より高いが、ドライバーの語学力やルートの習熟度、現地の通関手続きなど多くの課題もある」と述べた。今後リアルタイムのデジタル管理システムの構築も進めるという。将来的にはインフラと連携し、「ルート・貿易・産業」を融合させた越境物流エコシステムを作り上げたいと意欲を見

せる。彼の取り組みは、単なるルート延長にとどまらず、中国と東南アジアをつなぐ新たなビジネスモデルの進化を促すものだ。

『新華毎日電訊』2025年8月19日

見学とは一味違う工場ツアー

「工場深度ツアー」（工場を深く味わうツアー）が新たな観光トレンドとなり、自動車工場が人気観光スポットに変貌している。北京市の小米（シャオミー）工場ツアーにはネット受付初日に2万7000人が殺到し、入場券を手にしたのは1万人に8人。2024年には、合肥のNIOには13万人が訪れ、上海の特斯拉工場も観光名所となっている。

世界各地に産業観光は先例があり、ドイツのフォルクスワーゲンや日本の「白い恋人」工場では、生産過程の見学や体験を通じてブランド価値を

高めている。

中国には多様な産業があり、最先端の技術と知見を集めている。そこに三つの要素が推進力となりトレンドを作り出した。第一に、地方政府が観光資源として工場ツアーを推進、小米工場への直通バスや青島ビールの博物館などが整備された。第二に、消費者はより深い体験や学びを旅行に求めるようになったこと。第三に、55秒で車を「プリント」するBYDの工場のように、中国の製造力に魅せる実力があることだ。

工場ツアーは、ブランドイメージの向上や教育にも資する。工場の機械が営業マンとなりどんな広告コピーよりも心に響くメッセージを伝え、少年少女たちは電気自動車バッテリーの構造に目を輝かせる。これこそ次世代の担い手を育てる科学的啓発である。『上観新聞』『半月談』『燕趙都市报』2025年8月



◆令和7年度第6回理事会の議題（9月26日開催）

今月の理事会はホームページの作成、運用・管理とユーチューブ用動画の作成について協議し、予算通りの執行が出席者全員の賛同を得て承認された。

ホームページは10月1日（水）に一新され、運用されている。今後恒常的に改善していくので、お気づきの点、ご要望などをお知らせいただきたい。

また、また新会員歓迎会を11月28日（金）に、新年互例会を1月9日（金）に行なうことが決定された。

◆「長寿祝賀会」開催

9月12日（金）に「長寿祝賀会」を新橋亭で開催した。白寿、米寿、喜寿のお祝い対象者9名のうち7名が出席、それぞれからお言葉をいただいた。総勢30名の参加があった。

（事務局長代行 増野亨）

会員だより

◎新会員

〈協力会員〉木村仁氏、相模賢二氏

◎計報

鶴留エマ氏（89歳）

令和7年10月10日逝去

謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

〈陶陶句会〉馬場由紀子先生

未経験者も大歓迎。詳細は事務局までご連絡ください。

〈陶謡会〉松本千俊先生

現在休会中、メンバー募集中。興味のある方は事務局までご連絡ください。

〈二石会〉

参加希望者は、開催日前々日（木）ま

じメールの幹事（瀬崎明 asaken2000@gmail.com）までご連絡ください。

*10月発行号の2頁1段目

【正】黄媚氏 【誤】黄媚民
お詫びし訂正いたします。

みんなの写真館

ドイツ北部の歴史と美の象徴（表紙）

特にドーム型の屋根や尖塔は印象的です。

シュペリーン城はドイツ北部、メクレンブルク州フォアポンメルン州のシュペリーン市に位置し、湖に囲まれた幻想的な城として知られています。シュペリーン城の起源は10世紀まで遡り、最初はスラブ人の要塞として築かれました。その後、12世紀にドイツ人領主によって拡張され、長い間メクレンブルク公国公爵の居城として使用されてきました。現在の華麗な姿は19世紀半ばに完成したもので、ネオ・ルネサンス様式を基調としています。

城の周囲には美しい庭園が広がっています。城を取り囲む木々の豊かな緑と湖の青が、壮麗な建築と見事に調和し、自然と人工美の絶妙なコントラストが感じられます。季節の花々が彩りを添え、手入れの行き届いた芝生や並木道は散策にぴったりです。

湖畔の遊歩道からは、さまざまな角度で城を眺めることができます、どこから見ても絵になる風景ばかり。水面に反射する城のシルエットも見どころの一つです。

もちろん、こんな美しいお城は、目で見るだけではもったいない。昼食は湖畔のレストランに入り、窓際の席を取り、美しいシュペリーン城を眺めながら、地元の名物料理を味わいました。視覚も味覚も楽しみました。（姜晋如）

2025年11月の行事予定

- 6日(木) 14:00 公開 第18回 対面&オンライン講演会
「戦略的な価値を高めるグリーンランドの将来」
佐野利男氏(日本デンマーク協会会長・元デンマーク王国特命全権大使)
- 8日(土) 11:00 一石会囲碁例会(於 7階談話室)
- 11日(火) 14:00 謡曲会(松木千俊先生お稽古)
- 12日(水) 13:00 陶陶句会
兼題「立冬」および当季雑詠
- 13日(木) 14:00 公開 第19回 対面&オンライン講演会
「北朝鮮の後継者はジュエカ」
鈴木琢磨氏(毎日新聞客員編集委員)
- 21日(金) 14:00 公開 第7回【21世紀アジア塾】講演会
「北海道の歴史を歩く——戦争と拓殖の時代」
渡辺浩平氏(北海道大学名誉教授)
- 27日(木) 14:00 公開 第20回 対面&オンライン講演会
「超少子高齢社会におけるリカレント教育の課題と可能性」
矢口悦子氏(東洋大学学長)
- 28日(金) 14:45 自衛消防訓練(会員・テナント参加)
- 28日(金) 15:30 新会員歓迎会
※会員で参加ご希望の方は事務局までご連絡ください。

11月の会議予定

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 4日(火) 13:00 国際交流委員会 | 19日(水) 15:00 広報委員会 |
| 11日(火) 14:00 環境委員会 | 26日(水) 13:30 東北委員会 |
| 14日(金) 14:00 講演委員会 | 28日(金) 13:00 理事会(第8回) |

※下線は通常日程に変更あり。

【12月初めの講演会予定】

- 4日(木) 14:00 公開 第21回対面&オンライン講演会
「イノベーションの理論家、20世紀最大の経済学者の一人として名高いジョセフ・アロイス・シュンペーターの理論についての解説」
(仮題)
中野剛志氏(経済評論家)

みんなの 写真館

書画に見る日中交流の精神世界⑧

(協力：橘倉酒造不重来館)



犬養毅（1855～1932年）

岡山県出身。普通選挙断行論を貫く民権政治家。孫文、金玉均らを支援。立憲政友会総裁、文部、外務、内務、内閣総理大臣などを歴任。五・一五事件で暗殺される。

為生民立道 為萬世開太平 犬養□

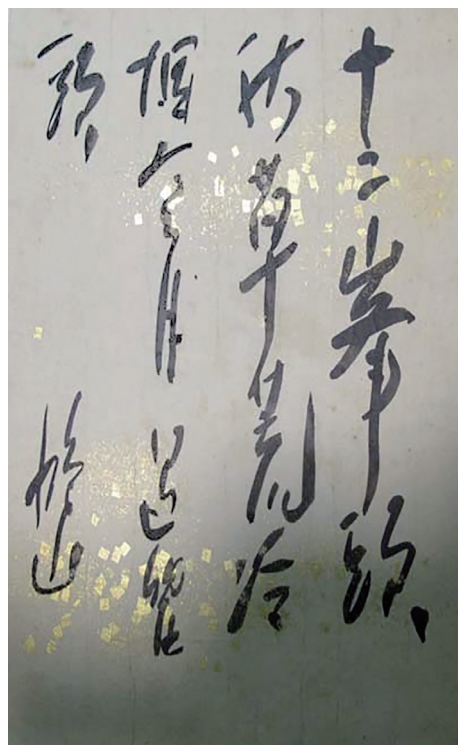
生民の為に道を立て 萬世の為に太平を開く

(出典) 朱熹・呂祖謙『近思録』第二卷「論学」

至誠神通 古一念□

至誠神に通ず

*「古一念」は小島一雄の号。犬養の側近。



鳩山一郎（1883～1959年）

東京都出身。戦時中大政翼賛会に反対した。田中義一内閣の書記官長、犬養毅・斎藤実内閣の文相などを歴任。田中義一内閣の書記官長、犬養毅・斎藤実内閣の文部大臣などを歴任。戦時中は大政翼賛会と東条内閣を批判。戦後は日本自由党創立の中心となり組閣を目前とするが、公職追放により政界から一時退く。1954年、第5次吉田内閣の総辞職後、首相に。

十二峯頭秋草荒

冷烟寒月過瞿塘 鳩山

十二峯頭 秋草荒れ

冷烟 寒月 瞿塘を過ぐ

(出典) 明代・何景明「竹枝詞」

*「十二峯」は四川省と湖北省の省境にある巫山を指す。

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>